

『グローバル化時代の地域と大学の役割』

北海道大学大学院 工学研究院長 名和 豊春(なわ・とよはる)

略歴: 1954年北海道三笠市生まれ。77年北海道大学工学部建築工学科卒業後、80年同大学院工学研究科建築工学専攻修士課程修了。92年東京工業大学より博士(工学)取得。秩父セメント(株)中央研究所、秩父小野田(株)中央研究所、北海道大学大学院工学研究科助教授を経て、2004年教授に昇任。その後、工学部評議員、工学研究院副研究院長等を経て、14年4月より工学研究院長・工学院院长・工学部長。



最近、グローバリゼーションの波が大学にも押し寄せてきている。1980年代後半からのインターネットをはじめとするIT革命は、流通コストの低減、新ビジネスの創出、コミュニケーションコストの激減をもたらした。このボーダーレスな経済の下では、グローバルな競争力が不可欠であり、国際競争力の強化、さらには新しいビジネスの開発が、私たちの生活、経済、社会を大きく変革している。

一方で、地域産業が崩壊し、地域経済の弱体化が進み、一人当たり所得の下落や、雇用減少による人口流出が大きな課題となっている。先進国の労働コストは開発途上国の数倍にもあたり、グローバルな競争力がなく、大企業が海外に進出し、その下請けであった地域産業は有効に手を打てず競争力を失いつつあるという理由が真しやかに囁かれる。

グローバル化と地域振興は、相容れない因子であろうか。グローバル化を最初に進めたローマ帝国の歴史を振り返ると興味深い。ローマ世界は、軍事上の覇権だけでなく、文明の共通化も進めたことはよく知られている。その礎を築いたカエサルは、統治システム、法律、軍事、街路や上下水道などの社会資本の分野では、しっかりローマ式を貫いている。しかし、ユリウス暦の採用を他の民族に強制しなかった。異種の文化が共存することを認めたのである。言い方を変えると、地方分権と中央集権とがバランスよく機能するのが、カエサルの考える帝国であり、それゆえにローマ世界は長期の安定を迎えたといえる。この考えに基づくならば、グローバル化というものとは経済や政治のレベルで世界を単一の基準によって統合しようとする国際化とは違い、その根底に地域性の独立を必然として有し、地域経済がどんど

ん盛んになっていくことによって実現するといえる。

地域経済は一次産業を基盤としていることが多い。農林水産業の「再生」が地域活性化に不可欠であるといっても過言ではない。しかし、TPP問題に見られるように農林水産業もグローバル化とは程遠い。その原因として、農林水産業は生産性が低いことが挙げられている。しかし、先進諸外国ではこれは常識ではない。例えば、ノルウェーの漁業の労働コストは日本の2倍であるにも拘らず、グローバル競争に勝ち残っている。魚の捕獲方法の改善や養殖の推進による資源管理の徹底や、魚の鮮度を保つための技術開発により、日本の約4倍に達する高い生産性を可能とし、地域が世界相手に競争をしているのである。

グローバル経済は、新技術の開発、新市場の開拓、あるいは新しい競争相手の出現によって絶えず変化する。生き永らえるには、変化に適応し続けなければならない。これが、イノベーションであり、大学を中心とした多くの研究機関が大きな役割を担っている。例えば、「フードバレー」で有名なワグeningen大学では、農業生産ばかりでなく、品種改良や食品加工などの生物・工学分野も含めた多方面の技術開発や高度の人材育成によって、世界最先端の農業を実現している。しかし、技術的なイノベーションだけで継続性を得ることは難しく、地域住民の意識変革が大切で、そのための教育・研究も不可欠である。今まさに、地域と大学が一体となって、グローバル化に対応した地域イノベーションを推進する時が到来したと思う。